最近のワイルド批評 （2005年4月～2007年3月）

活況を呈する「Wilde市場」
～研究成果の充実ぶりを示す2年間～

浦　部　尚　志

概況

Wilde歿後100年に当たる20世紀末を挟んだ、1980年代後半より今日までの、「意義ある」約20年間にOscar Wilde研究は間違いなく世界中で大きく進んだが、それを証明する現象のひとつとして、この数年のうちに今まで定本とされていた書物が相次いで版を新しくしていることが挙げられる。また、Wilde関連書物が多数出版される現在の流れを受けて、「既に〈Wilde市場〉は〈Shakespeare産業〉に比するところまで来た」という大言すらも聞こえてくる。20世紀末も遠くなり、2010年代をまもなく臨もうかという今日に至っても、Oscar Wilde研究が下火になる気配は見受けられない。それどころか、様々な文学・文化関係の学問的事象において、Wildeの名は頻繁に我々の目に止まる事態となっている。よって、これから先もWildeに関する新たな研究成果は次々に生まれ出ることが予想される。

各論

最近の文化論的研究隆盛の中、Wildeの作品では主に*The Importance of Being Earnest*と*The Picture of Dorian Gray*に考察が集中している感があるが、そのような状況下、過去2年のうちに出版された書物の中で注目されるべきものは、まず、下記の2冊であると言えよう。

Gillespie, Michael Patrick, ed. *The Importance of Being Earnest: Authoritative Texts, Backgrounds, Reviews and Reactions, Criticism*. Norton Critical Edition. By Oscar Wilde et al. New York: Norton, 2006.

——, ed. *The Picture of Dorian Gray: Authoritative Texts, Backgrounds, Reviews and Reactions, Criticism*. Norton Critical Edition. 2nd ed. By Oscar Wilde et al. New

York: Norton, 2007.

The Importance of Being Earnest の Norton Critical Edition はこれが 1st edition となる。Norton Critical Edition Series には、当該作品のテクストの他に、研究の「手引き」として、取り上げられた作品に関する代表的批評論文数篇の重要部分が掲載されているという特徴があるが、この本を概観すると、約 20 年前に出版された、Harold Bloom 編による同劇についての criticism のアンソロジー—— Harold Bloom, ed., *Oscar Wilde's The Importance of Being Earnest*, Modern Critical Interpretations (New York: Chelsea House, 1988)——のことが思い出される。この Bloom 編書内収録の critics としては、Ian Gregor, Robert J. Jordan, David Parker, Rodney Shewan, Katharine Worth, Camille A. Paglia, Joseph Lowenstein, Regenia Gagnier, Susan Laity という比較的懐かしい名前が並んでいた。そこでは今よりも比較的にオーソドックスな考察がなされていた感は否めないが、現在の先進的研究状況へと至るまでの萌芽が確実に垣間見られていた（そこには既に Regenia Gagnier や Camille A. Paglia 等の名が見て取れる）。

一方、今回の Norton 版 *Being Earnest* に収録された批評家の顔ぶれとしては、まず "Backgrounds" において、Karl Beckson, Joseph Donohue, Regenia Gagnier という 3 名の大家の名が窺える。彼らがまず Wilde と 1890 年代の文化的考察を示した後、William Archer, Hamilton Fyfe, George Bernard Shaw, H. G. Wells 等による当時の "Reviews and Reactions" が続き、その後、E. H. Mikhail, Eva Thienpont, Camille A. Paglia, Christopher Craft, Michael Patrick Gillespie, Peter Raby, Richard Haslam による criticism が掲載されるというラインナップになっている。—— Mikhail は *The Importance of Being Earnest* の 4 幕版異本について述べ、Thienpont は標準版である 3 幕本を定本として使用することの意義について語り、Paglia と Craft は同劇を活気付けている "sexual dynamics" に関する対照的な視点を著し、Raby と Gillespie は同劇の wit の概念と機能について解説し、そして Richard Haslam はこの劇を解釈する過程において Wilde の Irish identity を考慮することの重要性を呈示している。

Dorian Gray などよりも Wilde の作品の中では当初から比較的評価が高かった *Being Earnest* ではあるが、上記のごとく、時を隔てて類似する 2 冊を比較すると、その研究内容に進歩があったことが十分に窺える。そして、Wilde の最高の戯曲とされるこの作品が、Norton Critical Edition に今回初めて取り上げられ、またこの本が同時に、Bloom 編の前掲書と類似した、最新の critical works のアンソロジー を内包する書物として、約 20 年ぶりに出版されたことは、一種の "landmark" を記す出来事と言ってよいであろう。

さて次に、Norton Critical Edition の *The Picture of Dorian Gray*, 2nd edition の発行も、Wilde 研究史において、同様の "landmark" を記すものと言ってよいかもしれない。同書は今回、前版の全面改訂に及び、その編者も Donald L. Lawler から前出の Michael Patrick Gillespie へと変更になった。実は、この Norton Critical Edition, *The Picture of Dorian Gray*, 2nd edition も、その 1st edition (1988) から通じて、約 20 年ぶりの改訂となるものである。そして、中に収録されている critics の顔ぶれも大きく変化した。

1988 年出版の Norton, *Dorian Gray*, 1st edition に収録されている critics としては、Edouard Roditi, Morse Peckham, Barbara Charlesworth, Phillipe Jullian, Richard Ellmann, Joyce Carol Oates, Donald L. Lawler という、やはり今となっては懐かしい顔ぶれが並んでいる。研究内容が多様化した現在から見ると、この 1st edition に収録されている critical works は、*Dorian Gray* を biographical ないしは、allegorical に批評したものがいささかなりとも目立ち、これは *Dorian Gray* が「正当に」評価され始めた 1980 年代の「過渡期」——すなわち本稿の「概況」で述べた約 20 年前——を象徴する顔ぶれであったと言えよう。それが今回の 2nd edition に収録された critics としては、Michael Patrick Gillespie, Simon Joyce, Donald L. Lawler, Sheldon W. Liebman, Maureen O'Connor, Ellie Ragland-Sullivan, John Paul Riquelme という具合に、ほぼ全て新しい顔ぶれに刷新された（前編者 Donald L. Lawler 以外総入れ替えの上に、実は彼の論文すら差し替えられているのである）。

Gillespie は narrative の観点から *Dorian Gray* の discourse における「画一的」でない解読の仕方、すなわち「解釈の多義性」を示し、Joyce は sexuality の衝撃を元に同小説解釈の意義を探っている。Lawler は Wilde の自筆原稿を詳細に検討した結果を元に、同作品の 1890 年版から 1891 年版への成立過程を述べ、*Dorian Gray* の短絡的な textual criticism の危険性を指摘している。一方、Liebman は過去 20 年以上にわたる数々の批評論文の綿密な検討を元に、同小説の各主要登場人物の性格描写並びに作品内における主な役割について深い洞察を示している。更に O'Connor は、*Dorian Gray* を "Irish Tale" として解釈することの重要性について語り、Ragland-Sullivan は Lacan 的な精神分析的解釈を呈示し、Riquelme は Gothic の要素がいかにパワフルな衝撃をこの小説に賦与しているかを説明している。

かくして、上記で呈示した新旧 4 冊の本を比較・概観するだけで、この約 20 年間で Wilde 研究の方法や環境がいかに多様化したかが十分に窺えよう（これら

各論文の注の中に参考文献として示されている、過去に出版された研究書が夥しい数にのぼっていることも注目に値する)。そして、作家としての Wilde や彼の作品に対する見方が大きく変化したこともよく分かる。例えば、Sheldon W. Liebman も語っているように、*Dorian Gray* は 1980 年代まではほとんどの主要な critics から、"second-rate" であるとか、"deeply flawed novel" であるなどと解釈されることが多かった(あの Ellmann ですらその傾向があった)。が、過去 20 年のうちに同小説は勇躍 "great novel" と位置付けられるようになり、「かつては Wilde の confusion により生み出されたものであるとか、(19 世紀という) 時代の産物でしかないと解釈されてばかりいた *Dorian Gray* の irresolution は、作者 Wilde が人間のあるべき姿を理解していることの表れなのである」(Liebman, *Dorian Gray*, Norton, 2nd ed., p. 434) などと主張されているのを見るに至っては、誠に感慨深いものを感じざるを得ない。

尚、1890 年版 *Dorian Gray*「異本」に関する、Norton Critical Edition の Lawler 版 (1988) と Oxford UP の 2005 年 variorum 版 (Joseph Bristow, ed., *The Picture of Dorian Gray*, vol. iii of *The Complete Works of Oscar Wilde* (Oxford: Oxford UP, 2005)) の比較に関する議論は、当『オスカー・ワイルド研究』第 7 号の坂本光先生の項に詳しいので、ここでは特に立ち入ることをしないが、この *Dorian Gray*, Norton 2nd edition に掲載されている同小説 1890 年版テクストは、Norton 1st edition 所収の Lawler 版を完全に踏襲し、注を含め以前とほぼ変わりないまま掲載されていることを記しておく。

ともあれ、これら Norton Critical Editions の 2 冊が発行されたことは (1) 当該二作品研究の新たな "landmarks" として、(2) 大学院生レベル以上の研究者にとり Wilde の代表的二作品の新たな入門的書物として、大きな意味を持つと言えよう。

さて、Norton Critical Editions の話が続いた後では次にこれを挙げない訳にはいくまい、と思われるのが、**Joseph Bristow, ed., *The Picture of Dorian Gray*, by Oscar Wilde, Oxford World's Classics (Oxford: Oxford UP, 2007)** である。この本は元々ハードカヴァー版であった、Isobel Murray, ed., *The Picture of Dorian Gray*, by Oscar Wilde (London: Oxford UP, 1974) をペーパーバック版にしたもので、これまでも数回版を重ねてきたものだが、今回それを引き継ぐ形で、Joseph Bristow を編者に"new edition" として、中に収録されている "Introduction" や "Explanatory Notes" をも含めて、こちらも完全改訂となった。尚、この本は、前掲の Joseph

Bristow, ed., *The Picture of Dorian Gray*, vol. iii of *The Complete Works of Oscar Wilde* (Oxford UP, 2005) から派生したものである。この New Oxford World's Classics 版も最新の研究を元にして *The Picture of Dorian Gray* を再編集した信頼のおけるテクストであり、しかもより簡便に使えるものと言える。

また、看過できない事柄のひとつとして、前回の「最近の Wilde 批評」の中でも取り上げられていた、Oxford 版 Wilde 全集の続刊が、今期にもまた発行されたことが挙げられる。それが、**Josephine M. Guy, ed., *Criticism: Historical Criticism, Intentions, the Soul of Man*, vol. iv of *The Complete Works of Oscar Wilde* (Oxford: Oxford UP, 2007)** である。これは、2000 年から約数年おきにほぼ 1 巻ずつ刊行され続けている、Oscar Wilde の新しい Complete Works 刊行「プロジェクト」の第 4 巻に当たるもの。相変わらず、その極細部にまで注意の払われた、詳細な注や説明の量には圧倒される。Wilde 研究も遂にここまで来たのかと、何度見ても痛感させられる大著である。これからの Wilde 研究が、この "OET(=Oxford English Texts) series" 抜きで語ることができなくなるのは当然と言えよう。

さて、続いては通常の critical woks の紹介に移る。重要かつユニークな論考が今期にもかなりの数見受けられたが、そのうちの代表的な一つと言えるのが、**Josephine Guy and Ian Small, *Studying Oscar Wilde: History, Criticism, and Myth*, 1880-1920 British Authors Series Number 22 (Greensboro: ELT Press, 2006)** である。——学術的な研究成果は「一般大衆」に対してどう還元されるべきなのか? これは文学のみならず、どの学問分野においても必ず提起される問題のひとつである。まして、特に一般読者の間で高い人気を維持している Wilde のような作家のこととなれば、尚更のことである。しかし、学術界はそのような「問題」には敢えて目を向けようとはしていないのではないだろうか? そして実は、この傾向は、時代を越えて世界中で見られることなのではないか? この本は、そのような観点に基づき、Ian Small と Josephine Guy という現代を代表する二人の世界的に著名な Wilde 学者が、特に 1980 年代から 1990 年代にかけて提出された Oscar Wilde に関する様々な先進的学術研究成果と、一般読者の間にある「緊張関係」を「解きほぐす」ことを目的に、文学的 jargon を敢えて使わずに平易で分かりやすい解説につとめ、Wilde の人生と作品に関して新たな解釈を示そうとした "critical assumption" なのである。これは、まさに本稿のテーマである、「活況を呈する「Wilde 市場」」を象徴する論考と言え、「Wilde 人気」の「高まり」が、こういった事例を世界的に著名な学者たちに真剣に考えさせるにまで至った画期的な出来

事とも言えよう。尚、この本は、(1) 学術的な bibliography、(2) 伝統的な学術論文、(3) 主に学生向けの入門書、という 3 つのどの形態の academic book としても単純には分類できない本であり、その 3 つの範疇の局面全てを合わせ持ち、一般読者でも平易に近づけるようにした研究書、という体裁をとっている。

以下、この本の主要な論点を述べる。—— Oscar Wilde は、現代のどの英語圏の国々においても、一般読者の間で特に永続的に高い人気を持つ作家である。それは彼の著作がいまだに版を重ね、売れ行きが衰えないことや、その社会風刺劇が定期的に劇場の舞台にのせられ、かつ映画やテレビ番組に翻案されていることや、Amazon.com の review 欄においてアマチュア批評家による情熱的な批評が度々載せられていることや、また Sotheby のオークションにおいて Wilde ゆかりの品々の値段がいまだに高騰し続けていることでも証明される。このように Wilde の作品が一般読者の imagination の中に生き続けている理由としては、ひとつには彼の諸作品が非常に entertaining であること、もうひとつにはそれらが gender、倫理学、nationality、そして政治学等に関して、一般の間で広く、活発に、そして容易に近寄れる論争の焦点となってきたことが挙げられる。

しかし、同時に Wilde の文学作品は非常に多くの専門的な学識者たちをも引きつけてきた。特に 1980 年代から 1990 年代にかけて、学術的な分野では Wilde の文学やその周辺に関する研究が、文化論や社会学や哲学等の分野を巻き込んで大きく進んだ。そのような状況下、学術界と一般読者双方の間に存在すべき理想的な状態とは、作家に関する専門的学術知識と一般的な評判との間に「実りある邂逅」が期待できることであり、かつ一方が他方に自然なかたちで貢献し合っていることであると言えよう。にもかかわらず、学術的な分野の研究成果によって明らかにされた Wilde の真の姿と、一般読者の間でいまだに広まっている Wilde 像(=「無謀な恋愛沙汰を通じて己の人生を無駄にした同性愛の殉教者」という一般によく知られた神話)の間にはいまだに隔たりがあることが明白であり、学術的な論考が、これまで Wilde の一般的な評判、もしくは彼の諸作品の「読まれ方」(劇の場合には、「観られ方」)に何らかの影響を与えてきたかどうかには、議論の余地がある。

この学術分野からの貢献と一般読者の間に横たわるギャップの大きさの問題は、Neil McKenna によって示された最近のセンセーショナルな biography である、*The Secret Life of Oscar Wilde* (London: Arrow Books, 2003) によって痛烈に発せられた。McKenna が academic critics に対して突きつけた問いは、「批評家たちの特別な知識というものは一体誰に向けて発せられているのか?」ということであった。

実は、この本の著者たちは、McKenna によって提起された、このような「不愉快な」問題に大胆に立ち向かい、どうすれば学術界の求めるものが実用的なかたちで一般読者の興味を適切にそそることができるようになるか、ということを模索しているのである。そして、以上のことを常に考慮に入れながら、この本の論点は、言うまでもなく、(1) Wilde の人生に関する論考、(2) Wilde の諸作品に関する論考、の 2 つへと向けられる。そして、その 2 つを融合して Wilde の全体像を捉えることこそが、この本の著者たちが価値を見出そうとしている点なのである。

この本で明らかにされている著者たちの理論は、現代における文学研究理論の「常識」に照らし合わせてみると、非常にユニークである。彼らは、ほとんどの読者が出会う、作者 Wilde の永続的な "personality" と、彼の諸作品の文学的長所との間で生み出される特質を明らかにしたいと、主張する。が、そのときに、「文学テクストは単に言語による芸術品 (artifacts) としてのみ見るべきだ」とする、New Criticism や構造主義や脱構築等による理論的主張は、読者が作品を体験するときに妥当性が見出せないと、断定するのである (!)。確かに Wilde の作品を読むと、読者は常に、彼の人生に関する特別な知識により既にレッテルが貼られてしまったか、或いは、(特に彼の sexuality に関して) 何らかの状況へと当てはめられてしまった文脈(コンテクスト)へと行き当たる。例えばそれは、「今日 *Dorian Gray* を読むときに、Wilde と Douglas の icon 化した写真を心に浮かべずにいられる者が果たしているだろうか?」、或いは、「読者をまず最初に Wilde の作品へと誘(いざな)うのは、彼の人生に関する悪名によってなのではないだろうか?」ということなのである。そして、従来の "biographical reading" ほど単純でないにしても、この本の著者たちは、Wilde の主要作品はほぼ全て彼自身の "autobiography" と化しているのだ、というスタンスをとるのである。

Wilde は人生を通じて活発に自分自身の社会的立場を "promote" してきた。英国社会の社会的習慣を無視した唯美主義者やダンディーという姿から、洗練された社交界の名士にして文学者であり劇作家へ、更にファッショナブルな West End の社交界の花形へ、という具合に。この "self-promotion" は、最初は高度に成功を収めることのできた戦略であったが、その限界は 1895 年の裁判において劇的な形で露呈された。Wilde の文学作品は今まで biographical に解釈されることが多かったが、それは彼の後半生において既に制御を失っていた、このようなイメージを通してであった。そして、*The Ballad of Reading Gaol* や *De Profundis* のような出獄後の作品は、「流行(ファッション)」を作り出して行ったときの過程における作用を取り戻

そうとするための、Wilde 自身による（或いは、彼と Robert Ross 両人による）試みなのであり、或いは、英国という執念深く報復的な国家体制の犠牲者か、または、愛人である Alfred Douglas に対して抱いていた「全てを消耗し尽くしてしまう程凄まじかった熱情」によって引き起こされた悲劇の犠牲者であるという、彼の "criminal personality" を呈示しようという試みであると見ることができるのである。そして、20 世紀後半から 21 世紀に至るまでの数十年間を通じて Wilde の評判を形作ってきたなかで、おそらく、唯一にして最も重要な要因であるのは、そういったイメージの「永続的な性質」なのであって、Neil McKenna の最近の著作を除いて現代の伝記作者の中には、これらのイメージの解明に挑んだ者はほとんどいないと、この本の著者たちは指摘するのである。

しかし、このような視点を明確に呈示しているにもかかわらず、Small と Guy は、この本の中で新しい biography を作り上げる意図は持っていないし、Wilde という文化的 icon の意味を再構築するつもりもない、と述べている。実は彼らは、Wilde の神話、中でも特に彼の人生についての神話が、これまでに彼の文学的価値を形成してきたその大きさの度合いを明らかにし、その上で「伝記的な情報に基づいた批評（biographically informed criticism）」と彼らが提唱しているもの（p. 8）が、これから進むことになるであろう、その論拠を確立させようとしているのである。

尚、この本で扱われている Wilde の作品に関する考察は、*De Profundis*、*Intentions*、各劇作品、*Dorian Gray* そして short fictions といった主要作品（章立て順）のみで、一般読者が触れることの少ない、詩作品や無記名の journalistic works は基本的に扱わないとしている。また、Wilde の未完の作品や、或いは彼の著作かどうか定かでない *Teleny* のような作品についても appendix として巻末に掲載されているだけで、それらに関して特に新しい解釈を示すつもりもないと語られている。それは、「Wilde の "creative interests" に対する一般読者の認識度を高めたい」という目的に適うものではないから、というのが主な理由である。

以上の論点からも分かるように、大衆に分かり安い、比較的平易な言葉で書かれた Wilde の作品——実際は、その平易な言葉の裏にある彼の深遠な学問的裏づけを学術的な研究成果は既に気付いているのだが——と、その作者である Wilde は、学術的な世界と一般大衆の間における marginal な存在と言ってよいのであろう。

続いてもうひとつ注目すべき、挑発的な critical work として、**Paul L. Fortunato, *Modernist Aesthetics and Consumer Culture in the Writings of Oscar Wilde*, Studies in Major Literary Authors (New York: Routledge, 2007)** がある。前掲書が Wilde と「一般読者」との関係に焦点をあてたものだとすると、こちらは Wilde と一般「消費文化」との関係に注目した研究書である。いずれの criticism も、Wilde がいかに一般大衆の間で広く受容されてきた作家であるかということを論証するものと言ってよく、また、このような Wilde 像を明らかにすることが、近年の傾向のひとつであるように思われる。

Fortunato の主な論点は次のようになる。—— 1891 年、Oscar Wilde は "The Soul of Man under Socialism" を発表した。このエッセイは、社会主義の価値を称揚し、かつ俗物的な大衆に対抗する芸術家を擁護したものであったが、この中で Wilde は consumerism、中でもジャーナリズムとファッション両方の消費文化に従事する者たちに反対する立場を取っていた。ところが、それから 1 年も経たないうちに、West End の主要な劇場で彼の戯曲 *Lady Windermere's Fan* が大成功を納め、これにより Wilde の求める方向性は、「大衆」の要求を満たすことを最も志向するジャンルである、消費文化（consumer culture）へと転換してしまったように思われた。

これまで数々の critics は、以上の成り行きに振りまわされ、Wilde と消費文化（特にジャーナリズムとファッション両方の中で具現化され、また「流行の女性」をその icon としてもつ文化）との関係に確信がもてないままでいた。しかも、この点に関しては、Regenia Gagnier でさえ、事の有様（ありよう）を見誤ってきたのだと、Fortunato は指摘する。Gagnier は Wilde の商品化というものの内容を非常に巧みに分析してはいるが、Wilde の芸術的企みを解く鍵と見られて然るべきその論点を、「複雑化」（complication）という方向へ見誤っているというのである。Fortunato によれば、その「複雑化」と考えられてきたことこそが、実は Wilde の唯美主義の核となっているものなのだという。そして、Wilde によって示された芸術家の自主性に対する擁護それ自体が consumerism と密接に関わっていることを、今までその「複雑化」と考えられていた事象は、適確に示しているというのである。Fortunato は、主に以上のことを論拠として、Wilde には商品化されない芸術を作ることは不可能であったし、また商品化されることのない芸術を作ろうという意図さえも持ち合わせていなかったのだと、主張する。また、この本の中では "consumer modernism" という用語が使われているが、それは著者が Wilde の諸作品を、消費文化により成立するはずの商品と捉え、またそれらの作品が誕生した時点を "modernist aesthetics" における根源的な瞬間と見ているからなのである。

続いて Fortunato は、Edward W. Said 等の理論も考慮した上で、文学史上、Wilde がいなければ modernism はあり得なかった——中でも、特に Wilde が外面の美学（aesthetics of surface）に関与していなかったら modernism は成立していなかったという、挑発的な論考を進めていく。そして、consumer fashion の分析を通じて芸術の哲学を構築することによって、この「外面の美学」を理論化した人物こそが Wilde なのである、とも言う。

文学史における他の主要な modernist たちも自らの芸術を創造する上において、消費文化の要素を取り入れていたことは確かである。James Joyce の *Ulysses* 然り、Virginia Woolf の *Mrs. Dalloway* 然り。ただ、Wilde がこれらの modernist たちと異なっている点は、それ自体で消費文化と化している芸術、すなわち消費文化とは切り離して存在できるはずのない芸術を、彼が創り上げたというところにある。そして、Wilde のこのような「消費文化を元にした美の哲学（consumer-based aesthetic）」は、"The Decay of Lying" の中に元々見られるものなのだという。そのエッセイの中で Wilde は、「芸術」と「人生」との関係をおもしろおかしく補正して見せたのだけれど、そこには同時に、ラファエル前派の絵画が中産階級や上流階級の多くの女性消費者たちに与えたインパクトについての描写も含まれている。すなわち、Elizabeth Siddal や Jane Morris のような女性をファッショナブルに描いた D. G. Rossetti の絵画は、ただやみくもに何度も印刷を繰り返し、再現されてきただけの性質をもっているわけではないのである。実は、それらの絵画は一般大衆の間に流行のスタイルを作りだし、またドレスや室内装飾のトレンドをも決定していったことも注目に値するのである。そしてそれらの流行は、「Arts and Crafts 運動」によって創造された壁紙や、ファッショナブルな "aesthetic dress" のスタイルにも反映されてきたが、Wilde はこの「ファッション現象」の性質を "The Decay of Lying" の中で指摘しており、そのことを大衆文化における市場売買と意味深長に結び付けていったのである。

更に Wilde は、自らの文学作品（特に劇）において一般大衆にインパクトを与えたい、という欲求を自らの思想の中心に据えたため、彼の consumer modernism の要素は、外面的な装飾と儚い大衆的イメージへと決定付けられたと考えられるのだという。そしてその両方の局面を、Wilde は消費文化の儀礼的行為と結びつけることになったのだともいう。このようにして Fortunato は、Wilde が「消費文化社会」において "promote" していった「戦略」を分析していくのである。

他の critics は、これまで様々な理由で次のような疑問に答えることができなかった。すなわち、「Wilde は流行の大衆文化と modernist aesthetics をどのように融合させていったのか？」、「なぜ Wilde は 1884 年から 1890 年の間に自らの精力の多くを新聞や雑誌業界に投資したのか？」、そして「自らの偉大な批評的エッセイである *Intentions* を発表した後で、なぜ Wilde は明らかにスタンダードとも言える comedy（すなわち、深刻な社会問題ではなく外面的なファッションや上流社会の内輪話を扱った comedy）を書こうとしたのか？」などという疑問である。実は、Fortunato のこの criticism は、以上のような幾つかの「不可解な」疑問に対して、答えを見出そうとしたものなのである。

最後に、日本国内の動向にも少し目を配っておきたい。まず、**Oscar Wilde, ed., *The Woman's World: November 1887-October 1889*, 2 vols., (Athena Press, 2007)，別冊解説：玉井暲・角田信恵**のことをここに挙げない訳にはいかない。これは、Oscar Wilde 編集による雑誌、*The Woman's World* の復刻版である。Oscar Wilde を編集者に据え、そこに多くの著名な女性たちが記事を寄稿した 19 世紀後半の雑誌、*The Woman's World* には、文学・美術のみならず、女性の地位向上や権利獲得、教育、職業、ファッション等に関する記事が多数収録されており、19 世紀英国における女性問題、gender、服飾史等の研究にとっても一次資料となるもので、前掲の 2 つの重要な criticism に代表される、昨今の先進的 Wilde 研究との関連においても欠かせない資料と言えよう。当協会の玉井暲・角田信恵両先生による別冊解説も興味深い。

また、更に次の大著も Wilde 研究者には見逃せない。**富士川義之・高遠弘美・井村君江編纂、『矢野峰人選集』第 1 巻・「エッセイ・詩・訳詩」、（国書刊行会、2007 年）**は、日本における世紀末研究の権威でもあった、《学匠詩人》矢野峰人先生の文学的全貌を余すところなく示す、初の著作集。単行本未収録作品も多数収録。この第 1 巻は六つの詩集・訳詩集を全収録の他、エッセイも百編収録。全 3 巻で、以下続刊（第 2 巻は「比較文学・日本文学」、第 3 巻は「英文学」）となっている。

総括

以上のように近年、Wilde 作品の優れたテクストや翻訳書、並びに Wilde に関する研究書等が世界中で頻繁に出版されている。それゆえ、今回この限られた紙面では全てを伝えきれず、掲載を諦めた書物も多数存在することをここにお断りしておく。